

日本応用地質学会中国四国支部設立 15 周年記念行事

記念シンポジウム「中国四国地方の自然遺産・文化遺産と応用地質学」

平成20年10月3日 岡山県国際交流センター

講演概要集

巻頭言

基調講演 : 地質遺産と応用地質

岩松 暉先生 (地質情報整備・活用機構会長)

講演 1 : 山陰地域の自然遺産・文化遺産と応用地質学

横田 修一郎先生 (島根大学理工学部)

講演 2 : 世界遺産・厳島の土砂災害と庭園砂防

海堀 正博先生 (広島大学大学院)

講演 3 ; 瀬戸内海の石と文化

長谷川 修一先生 (香川大学工学部)

講演 4 ; 四国まるごとジオパークーその魅力とあり方

横山 俊治先生 (高知大学理学部)

日本応用地質学会 中国四国支部

支部設立 15 周年記念シンポジウム

「中国四国地方の自然遺産と文化遺産」の開催にあたって

約 20 年前、対米協調を目的とした金融緩和政策と内需拡大政策によるバブル経済のなか、建設業界もリゾート開発や不動産投機に走らされた。そして、究極まで上昇した地価バブルは、急激な総量規制と金融引き締めによってあっけなく崩壊した。その後国際公約である国債による公共事業の大奮発のおかげで建設業界は大いに膨らんだ。しかし借金による大量の輸血も、一方で外圧による金融ピクバンと低金利による大出血状態では景気回復の効果が出るはずもない。そこで小泉構造改革によって公共事業をぎゅっと絞れば、効果は絶大。これに地方交付税の大幅減額による追い打ちで、地方はまさに崩壊寸前である。

この余波は、当然建設コンサルタント業界や地質調査業界を襲う。日本応用地質学会中国四国支部が設立された 15 年前（1994 年）以来、建設コンサルタント業界や地質調査業界に職をおく会員が主力の日本応用地質学会中国四国支部も、時代の波に翻弄されながらも、歯を食いしばり活動を続けてきた。しかし、明るい展望はなかなか見えてこない。

これまで、応用地質学会は、会員の公共事業支援業務等を通じて陰ながら社会に貢献してきた。しかし、このことが社会に十分評価されないばかりか、ともすれば建設業の下請け的な立場になりがちであった。そこで、15 周年記念シンポジウムを通じて、応用地質学が文化に貢献できる道を探ってみたいと考えた。これは、いくら業務を通じて社会に役に立っていても、それで飯を食っていれば当たり前前の仕事である。地道に仕事をして、さらに地域あるいは日本の文化に貢献できたとき、社会的に評価されるのではないのか？

2004 年のイタリアのフィレンツェで開催された第 32 回万国地質学会でサヌカイト楽器を紹介し、ジオパーク、ジオツーリズムや石材のセッションに顔を出し、地質と文化を再考する機会を得た。そして応用地質の分野は観光や文化に広がっていることを知った。中国四国支部では、2002 年の全国大会時に「瀬戸内の石の文化」（実は「讃岐の石の文化」）と題して、庵治石とサヌカイトの採石場と芸術を訪ねた。今にして思えば、この見学会は応用地質が半分、文化が半分のジオツーリズムであった。

近年地域の観光資源を世界遺産へ登録し、観光客を呼び込もうと各地で活動している。しかし、日本における自然遺産や文化遺産あるいは資源には、地質学だけでなく、応用地質学的な視点はほとんどない。これは、我々の努力不足と認めざるを得ない。中国地方には、すでに 1996 年に原爆ドームと厳島神社が、また 2007 年には石見銀山遺跡が世界遺産に登録された。我々は、これらの遺産に応用地質学的な価値をどれだけ見つけて、発信できるだろうか？ また、我々はこれ以外に応用地質学的な価値が高い自然遺産や文化遺産をどれだけ知っているのだろうか？

本シンポジウムでは、地質情報整備・活用機構の岩松暉会長に、「地質遺産と応用地質」と題して高い視点、広い視野からのご意見をお伺いする。また、島根大学の横田修一郎教授には石見銀山を含めて山陰地方の自然遺産・文化遺産を、広島大学の海堀正博准教授からは安芸の宮島と庭園砂防についてご紹介いただく。さらに、香川大学教授の長谷川修一から瀬戸内の石と文化の紹介を、高知大学の横山俊治教授から四国まるごとジオパークの提案を行う。また、10 月 4 日は、香川県土庄町豊島で 20 世紀の負の遺産と数百年にわたる豊島石の遺産を見学する。

このシンポジウムでは、応用地質を生業とするものとして、自然と祖先が作りあげた遺産を次世代にいかにか引き継ぐのか、一緒に考えてみたい。

平成 20 年 10 月 3 日
日本応用地質学会中国四国支部
支部長 長谷川修一